

# 2018

## 第16回 群馬県図書館大会 報告書



平成30年11月29日（木）

会場：群馬県立図書館

## 目次

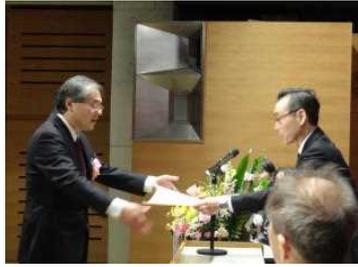
全体報告	1
記念講演 「ビブリオバトルでつながろう、 人と本、人と人をつなげる、図書館に向けて」（谷口 忠大 氏）	4
第1分科会報告 「読書支援ツール『Life with Reading』による 新しい読書推進アプローチ」	7
第2分科会報告 「災害時及び復興における図書館の対応と役割」	12
参加者の声	17

※ 講師等の発言は、大会当日1回限りを前提とした発言内容を事務局及び分科会検討会で要約したものです。転載・2次利用は固くお断りいたします。

# 1 全 体 報 告

事業名	第16回 群馬県図書館大会
日時	平成30年11月29日(木) 10:00~16:30
会場	群馬県立図書館
主催	群馬県図書館協会(群馬県立図書館、群馬県公共図書館協議会、群馬県大学図書館協議会、群馬県高等学校教育研究会図書館部会、群馬県小中学校教育研究会学校図書館部会)
後援	群馬県教育委員会
大会テーマ	新時代の図書館 ～図書館の明日を考える～
日 程 ・ 内 容	<p>1 式典(10:00~10:30)(群馬県立図書館 ホール)</p> <p>(1)主催者挨拶 群馬県図書館協会 会長 中山 勝文</p> <p>(2)来賓祝辞 群馬県教育委員会 教育長(代理) 北爪 清(教育次長)</p> <p>(3)後援・加盟団体紹介 群馬県教育委員会生涯学習課 課長 船引 忠雄 群馬県公共図書館協議会 会長 松井 玲子 (沼田市立図書館 館長) 群馬県大学図書館協議会 会長 田中 麻里 (群馬大学総合情報メディアセンター長) 群馬県高等学校教育研究会図書館部会 部会長 竹澤 敦 (群馬県立太田フレックス高等学校 校長) 群馬県小中学校教育研究会学校図書館部会 部会長 間庭 望 (高崎市立片岡中学校 校長)</p> <p>(4)表彰式 ①優良図書館群馬県教育委員会表彰 太田市立中央図書館 ②群馬県読み聞かせボランティア顕彰 EBAの会(前橋市) 読み聞かせの会”はすの実”(伊勢崎市) 母ぐまの会(桐生市) せせらぎおはなし隊(甘楽町) 草津よみきかせの会(草津町) ③優良読書グループ表彰受賞グループ 藤岡市読み語りの会ネットワーク(藤岡市)</p>

日 程  
・  
内 容



(太田市立中央図書館)



(EBAの会)



(読み聞かせの会”はすの実”)



(母ぐまの会)



(せせらぎおはなし隊)



(草津よみきかせの会)



(藤岡市読み語りの会ネットワーク)





### ■ビブリオバトルはこうして生まれた

貴重な機会をいただきまして光栄に感じております。

自身のバックグラウンドは理系であり、小学校の時は、国語が最も苦手な教科だった。ビブリオバトルというと読書推進（「本を読みなさい」というイメージ）と捉えられているようだが、ビブリオバトルは、自分が「本のことを知りたい」という思いから生まれたものである。

ビブリオバトルの誕生は2007年。大学の研究室で、研究員がそれぞれ見つけてきた本をシェアする、というアクティビティーが始まりである。もともと、

大学の研究室では1冊の教科書を輪読するスタイルで勉強していた。1冊の教科書は一人の代表者が選ぶのだが、一人で複数の本を読まなければならないことや、読むのに時間がかかるということから、代表者の負担感が大きかった。また、代表者にとっては、読んだ時点で自身の勉強が終了しているので、研究室で再び同じ本で勉強しても新たな知見を得られない、ということもあった。そこで、従来の教科書選びのスタイルから、研究員全員が一人1冊見つけて来た本を持ち寄り、その中からどの本で勉強するのがいいかを全員で選ぶ、というやり方に変えた。これが、ビブリオバトルのはじまりである。はじめは、ビブリオバトルという名前などついていなかったが、当時出始めたYouTubeにこの活動をアップすることになり、何かかっこいい名前を付けようということで、「ビブリオバトル」という名称を付けた。

研究室で、ビブリオバトルを繰り返しやっているうち、自分自身が多読になったことを実感した。また、研究室の他の人がどんなことに興味を持っているのかが分かるようになってきた。「これはためになる」と思うようになってきたころ、周囲からも「ビブリオバトルはいいね」という声が聞こえるようになってきた。自分たちだけが楽しいものだと思っていたが、他の人がいいと思うのだったら広めていこう、ということになり、2010年に普及委員会が発足した。

### ■ビブリオバトルの4つのルール

ビブリオバトルを多くの人に楽しんでもらうために、ビブリオバトルの持つゲーム性を生かし、ルールを整えた。ビブリオバトルには4つのルールがある。一つ目は、参加者全員が読んで面白いと思った本を持って集まる、というルール。二つ目は、順番に一人5分間で本を紹介する、というルール。早くおわってしまっても5分間つなぐ。つなぐ間に無理やりひねり出す言葉が面白くなったりする。また、いつまでも話し続ける人に対しては時間の区切りをつけることができる。一人5分間というのは平等である。三つ目は、全員が発表した後に、それぞれの発表についてのディスカッションを2～3分で行う、というルール。本を紹介するだけの一方向ではコミュニケーションはとれない。ディスカッションを行うことで発表者と聞き手を双方向につなげていくことができる。四つ目は、全ての発表とディスカッションが終わったら、どの本が一番読みたくなったかを基準とした投票を参加者全員一票で行い、最多票を集めたものを「チャンプ本」とする、というルール。「どの本が一番読みたくなったか」が重要である。「発表がよかった人」に投票してしまうことがあるようだが、ビブリオバトルは本を紹介するゲームであるので、「一番読みたくなった本」に投票しなければならない。それなら発表はどうでもいいのか、というとはなく、読んだ本の何がいいのかが、聞き手にちゃんと伝わる発表があつてこそ、一番読みたくなった本に投票することができるのである。

### ■ビブリオバトルの広がり

ビブリオバトルは、この4ルールがあれば、誰とやってもどこでやってもよい。どのような本

を紹介するかについては何の決まりもないので、様々な場面でビブリオバトルを行うことができる。

はじまりは大学の一研究室だったが、今では、公共図書館、書店、学校、PTAで行うビブリオバトルや、カフェで行う「妖怪ビブリオバトル」、古民家に宿泊して行うビブリオバトルなどがあり、日本全国様々な場所で行われるようになってきている。さらに、一般企業の新人研修や、社内のコミュニケーションに活用されている例もある。会社でビブリオバトルが取り上げられるのは、ビブリオバトルを行うことで、縦割り組織に横のつながりを持たせたり、自分の仕事以外の分野に関心を持たせたりすることができるからだろう。また、海外では、シンガポールや韓国、中国、ニューヨークにも広がってきている。

2012年には、図書館総合展で、その年の図書館に関する特徴的な活動に与えられる「ライブラリーオブザイヤー」という賞をいただいた。ビブリオバトルは、そもそも図書館を意識して始めたものではなかったもので、特異な受賞例だったといえる。

2013年には、文部科学省「第3次子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」の本文中で、ビブリオバトルについて言及され、地方自治体の教育活動で取り上げられるようになり、ますます図書館との関わりが深くなってきた。2年前からは中学校の国語の教科書に、読んだことを共有する活動として掲載されている。さらに、今年更新された、文部科学省「第4次子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」では、概要版に、友人同士で本をすすめ合うなどの読書への関心を高める取り組みとして、「書評合戦ビブリオバトルなど」と紹介されている。このように、近年、ビブリオバトルの立ち位置が前面に出てきた感じがある。

ところで、ビブリオバトルはどのくらい広まっているのだろうか。グーグルトレンドというサービスではネット上でどのくらい検索されているかという情報をつかむことができる。それによると、読書会やブックトークと比較して、ビブリオバトルは2010年くらいから読書会と並ぶ程度の検索量があることが分かる。ちなみに読書感想文は、夏だけ検索量が増すという特徴がある。読書感想文が夏だけ関心が高まるのは、夏休みの宿題として課題となることがあるからだろう。その点ビブリオバトルは、読書の秋の10～11月に若干検索量が増えるが、おおよそ一年を通して関心を持ってもらっている。

## ■人を通して本を知る、本を通して人を知る

ビブリオバトルは、「人を通して本を知る、本を通して人を知る」というスローガンを掲げている。

一つのコミュニティーの中で1冊のいい本を見つけだそうとする時、ビブリオバトルは、検索エンジンの場になっていると考えられる。チャンプ本を選ぶために起動するエンジンは、第一に、自分の中にある本の知識を駆使して一番面白いと思った本を見つけ出す行為、第二に、コミュニティの中で得た情報から一番面白いと思った本を見つけ出す行為である。ビブリオバトルでは、このように、2段階の検索システムを使って1冊の本を選んでいるといえる。本の選び方として、コンピューターを使ってキーワードで検索するという方法があるが、その場合は、似た種類の本を検索することになる。さらに、これまでの検索履歴を学習している場合においては、ますます個人の好みに沿った検索の仕方となる。このような「あなたはこれが好きでしょう」という検索に対して、ビブリオバトルは、他者の「私はこれが好きなんです」という方向からの検索となる。ビブリオバトルで1冊の本を選ぶ時、刺激が多く、発見があり、広がりも感じられるのは、「人を通し」た検索が仕組まれているからである。

実は、ビブリオバトルを始めた当初、「人を知る」ほうはあまり考えていなかった。しかし、やっているうちに、この人はどのようなことに興味があるのだろうか？この人はどのような人間性を持っているのだろうか？この人はそんなこと考えていたのか！ということにも、自分自身が高い関心を抱いていることに気が付いた。人は、ふつう他者の考えていることを見ることはできないが、好きな本を紹介すれば、本がその人を表す記号となるので、「本を通して」その人のことを見ることができる。「あなたはどのようにしてこの本を読んだのですか」と問われて、「昔、母親に読んでもらったことがあります・・・」というように、これまでの経験をもとに答えれば、本を通して自分自身を語っていることになる。もし、教室で「あなたこれ読んできなさい」と言って読ませたなら、「あなたはどのようにしてこの本を読んだのですか」という問いに対して、「先生に、読んできな

さいと言われたから」と答えてしまうことになり、本来のその人らしさに触れることができなくなってしまおう。

また、ビブリオバトルで、友達が紹介した本が面白そうだと思って読んでみたのに、「聞いた話とちがうぞ」ということもしばしば起こるが、この気付きが、また面白いと思っている。こうした気付きは、自分の考え方と人の考え方には違いがあるのだということを知る機会となる。

ビブリオバトルには、既存のコミュニティーの中で行う「コミュニティー型」、観客の前で行う「イベント型」、集まった人たちをグループに分けて行う「ワークショップ型」があるが、バックボーンが分からないイベント型では、「人を知る」よさがあまり出てこない。家族や友人などのコミュニティー型が「人を知る」よさが出てくるやり方であり、お薦めである。なぜなら、ビブリオバトルのそもそもの始まりはコミュニティー型だからである。

### ■一番大事だと思っていること

一番大事だと思っているのは、楽しんでやることである。本と触れ合うのが楽しい、人と話すのが楽しいと感じてやってほしい。発表は、グダグダが理想。うまくしゃべれなくていい。そして、繰り返しやってほしい。

教育系の現場で行う場合は、まず先生たちが体験してからやってほしい。先生同士で体験したら、先生が子供たちの前でやり、子供たちに背中を見せるといい。その次の段階として、ワークショップ型でやらせるのがいいだろう。

公共図書館で行う場合、とにかく集客にこだわりがちだが、それよりもコミュニティーを作り、ビブリオバトルを行うコミュニティーを育てるプロセスをサポートしていく、というのがいいだろう。

### ■Q & A

Q：本を読まないと広がらない。本を読まない人へのアプローチについてはどのように考えていますか。

A：「読んだら得」「読んだら面白い」「読まなくては」と思えるポジティブな環境を作ることが大切ではないか。横から友達が、本を読んだ感想をおもしろそうに言うてくる、ビブリオバトルをやったら、意外な友達がチャンプ本をとった、自分もとりたい、好意を持っているA子ちゃんがこの本を読んだ、それなら読んでみたい……。こういった環境が本を読む行動につながるのではないかと。ビブリオバトルを日常的に行ってみてほしい。

Q：参考になるウェブサイトを教えてください。

A：ビブリオバトル公式サイトがあります。タイマーが使えます。YouTubeもあります。

A：イベント型でのリスクについて教えてください。

Q：投票に関する課題がある。本当に読みたいものに票を入れるというルールを遵守させることは一つの教育であり、イベント型でビブリオバトルを行うことは、教育のよい機会となる。表現の自由や自分の意思で選ぶということについて改めて教育してほしい。客観的に票を入れられない人は、初めから参加者の席ではない観客席にいてもらう、という対策法もある。

A：日常的にやるにはどうしたらよいか。

Q：イベント型を日常的にやるのは難しい。集客や司会に関係のないワークショップ型なら可能だろう。自分が中心になってやるのがいいだろう。

A：先生が最近読んで面白かった本を教えてください。

Q：角川ビーンズ文庫「ジャマしないですよ、大神くん！」です。ドキドキ胸キュン系が結構好きです。よく、ビブリオバトルは、ライトノベルやマンガでもいいのかと聞かれるが、構いません。



## 2-1 分科会報告

分科会名	第1分科会
日時	平成30年11月29日(木) 13:30~16:30
会場	県立図書館3階ホール(講義) 4階第2読書室(ワークショップ)
テーマ	読書支援ツール「Life with Reading」による新しい読書推進アプローチ
開催趣旨	<p>図書館の利用者減少の要因に、「読書体験」の減少が考えられます。慶應義塾大学井庭研究室と有隣堂は、共同研究で、読書のコツや楽しみ方を言語化した読書支援ツール『Life with Reading—読書の秘訣カード』を制作しました。27枚のカードには、様々な状況での読書の体験やコツ、楽しさを共有することが容易になる言葉とその説明が掲載されています。</p> <p>第1分科会では従来の図書の価値に基準を置く読書推進とは異なるアプローチ、『Life with Reading—読書の秘訣カード』をワークショップで体験し、新しい読書推進について考えます。</p>
日程・内容	<p>13:00~13:30 受付          13:30~14:30 講義・事例紹介 渡辺 泰氏((株)有隣堂 社長室室長)          14:30~14:55 講義 木村 紀彦氏          (慶應義塾大学政策・メディア研究科「Life with Reading」プロジェクトリーダー)          14:55~15:00 ファシリテーター紹介          15:00~15:10 移動・休憩          15:10~16:00 ワークショップ 木村 紀彦氏          16:00~16:25 各グループ発表 発表者: ファシリテーター          16:25~16:30 まとめ</p>
参加者状況	合計73人(一般参加者55人、講師2人、スタッフ16人)
係分担	<p>講師: (株)有隣堂 社長室室長 渡辺 泰氏          慶應義塾大学 政策・メディア研究科 木村 紀彦氏          ファシリテーター: 秋間(邑楽町)、飯田(大泉町)、桑原(桐生市)、          諸星(太田東高)、林(桐生高)、青木(高崎工業)、          柘植(群大)、市村(県立)          講師紹介及び司会: 井田(県立)          受付: 佐藤(伊勢崎市)、橋本(明和町)          記録: 原(館林市) 写真: 黒崎(前橋市)          照明・音響: 奥原(県立) 会場: 田部井(西邑楽高校)、桑山(吉岡町)          接待: 柘植(群大)、市村(県立)</p>
配布資料	『Life with Reading—読書の秘訣カード』パンフレット 小中学校教諭を対象とした「読書の秘訣カード」の活用事例について Workshop01 Workshop02 手順書
評価その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・講義では、『Life with Reading—読書の秘訣カード』の制作と共同研究の経緯、その誕生の源であるパターン・ランゲージ理論について、書店経営と学術の第一線で活躍する講師による熱意あふれるプレゼンテーションが行われた。</li> <li>・参加者数の増加により、ワークショップの会場を急遽変更したが、スタッフのチームワークと臨機応変な対応により、円滑に分科会を運営できた。</li> <li>・ワークショップでは、「対話のワークショップ」と「アイデア発想ワークショップ」を体験し、個人の読書体験と図書館で取り組む新しい企画について楽しく語り合った。ファシリテーターによる発表は「ライトニングトーク」の手法で行われ、新鮮な発想が簡潔に発表されると、会場から自然に拍手が湧き起こった。</li> <li>・ワークショップのグループ編成は、くじ引きで行ったが、図書館員と利用者という垣根を超え「読書」について語る体験ができたという好評を得た。</li> <li>・講義とワークショップの2部制により、理論と実践の両面から新しい読書推進方法にアプローチした。参加者からは「新たな発想が生まれるきっかけになった。とても楽しく学ばせていただいた。」「刺激を受けた。ぜひ実践してみたい。」などの意見が寄せられた。</li> </ul>

## 講義1 「Life with Reading—読書の秘訣カード」について

講師：渡辺 泰氏（株式会社有隣堂 社長室室長）

有隣堂は、横浜市伊勢佐木町に本社がある1909年創業の書店。社名の由来は「徳は孤ならず、必ず隣有り」という論語からとっている。書籍、文具、雑貨、カフェなど首都圏で55店舗を展開。出版業務や図書館の委託業務も行っており指定管理は3館を運営している。特に読書推進に力を入れており、ビブリオバトルを2013年から行っている。カフェやショッピングセンターなどで実施したり、アイドルビブリオバトルなども実施したりして、2017年に「ビブリオバトル・ザ・イヤー」を受賞した。

「Life with Reading—読書の秘訣カード」の共同開発の背景に、2017年3月の朝日新聞に掲載された「読書はしないといけないのか」という大学生の投稿がある。「本を読まないのはよくないと言えるのか。読書は楽器やスポーツと同じように趣味の範囲であり、読んでも読まなくても構わないのではないのか。もし、読書をしなければいけない確固たる理由があるならば教えていただきたい」という記事で、とてもショックを受けた。また、中学生の「大人は読書をし付けなくていい」という投稿もあった。「読書をし



しつけるのは、運動が苦手な人にスポーツをし付けると同じだ。楽器が弾けない人に今すぐ弾けとっているのと同じだ」というものだった。これに対し、自分はどうか答えるのか、これがずっともやもやとして、どうして読書推進活動をやらねばならないのか分からなくなってきた。さらに、本が売れなくなってきた。様々な要因があるが、そもそも本を読む人が減ったことが原因である。そのような中、図書館も書店も出版社も含め「何かできないか」ともやもやしていたところで、井庭崇先生の話聞く機会があり、「中空の言葉」という言葉に感動して、パターン・ランゲージに強い関心を持ち、読書推進の共通言語のようなものが作れないかと思った。そして、2017年4月に共同研究スタート、11月にプロトタイプ発表、今年5月に製品版を完成し、販売を開始した。

「Life with Reading—読書の秘訣カード」はポストカード型のカードが31枚、27の言葉が9つずつ3つのカテゴリーに分かれている。「読書のコツ」には、ラフに読む、自分なりの書き込み、好きな読み方、本との先約、自分にとっての価値、まわりを巻き込む、本のなかのリンク、感覚が近い人、自分の本棚、「読書の楽しみ方」には、本への愛情、こだわりの発見、とっておきの場所、なじみの本屋、本の散策、今日のおとも、追っかけ読書、本がきっかけ、本のある生活、「創造的読書」には、発想の素材、スタイルの継承、勇気の源泉、別の可能性、本のデザインから、考えの型、つくる人生、世界の流れ、未来のかけら、という言葉が書かれている。なぜこのようなカードを作ったかという、「読め、読め」というから「なんで読まなきゃいけないか教えて」という投稿になる。さかなくんはテレビで本当に楽しそうに魚の話をするので、視聴者は魚に興味を持つ。このように、読書の楽しさを伝えたい。また、井庭先生の研究室の中でも、本を読む人と読まない人がいる。その違いは何なのか、創造的社会にふさわしい読書の在り方は何なのか、ということから3つのカテゴリーを作った。

カードの使い方は、見えるところに飾る、本好きの人に話を聞く、経験を語り合う、読書のしかたを伝授する、という使い方がある。例えば、「ラフに読む」は、本を最初から最後まで読み通そうとすると、途中で挫折したり読み切れる自信がないため読み始めることもできなかつたりするため、細部にこだわらず重要そうな文章や箇所を拾い上げるように読み進める、という方法。また、本を読まない人は「時間がない」という。そんな人には、スケジュール化という固くなるので、「本との先約」として本を読む時間を自分の手帳に書き込み、「4時から村上春樹と約束がある」みたいな感じで本との先約をする。「今日のおとも」は、その日の気分にあった本を選ぶ。

「追っかけ読書」は、その人と話すために、その人が読んでいる本を自分も読んでみる、というような使い方である。横浜市青葉区の山内図書館で、来館者を対象にカードを使ったワークショップを行った。カードを配って、自分が選んだカードを読み、なぜこのカードを選んだのかをグループ内で話す、聞いている人は感想を付箋に書く、どんな意見が出たかをグループの代表者が発表するというものだが、年が離れていても本の話で盛り上がり、楽しかったという意見が出た。横浜市内の中学校の授業では、「好きな読み方」のカードを実践し、好きな本を選んで好きなところで読んでいい、という時間を作ったところ大変好評だった。子どもには難しいという意見が多く、小学生を想定した子ども版を制作中である。

## 講義2 「パターン・ランゲージ」について

講師：木村紀彦氏（「Life With Reading」プロジェクトリーダー）

慶應義塾大学井庭崇研究室では、これからの時代は人々が組織・社会でより創造的に活動できるようなる「創造社会」になるというビジョンを掲げ、その創造社会を支える方法や道具を作る研究をしている。その一環として「パターン・ランゲージ」という研究システムに取り組んでいる。いろいろな企業と共同研究をしているが、有隣堂との共同研究で「Life With Reading」という「創造的読書のパターン・ランゲージ」を作った。パターン・ランゲージとは、ある領域における「経験値」を「言語化」したものだ。

ある領域、例えば料理とかスポーツなどで、どうすればその領域で成功できるか、どうやったら上手く料理が作れるか、上手くやれる秘訣やコツがあるはずで、パターン・ランゲージとはその上手くやれるコツを言語化するものである。どうやったら上手くできるかは、上手くできる人は何となく分かっている。それを学ぶためには言葉があるとより学びやすい。そのために行方を指す言葉を作っていけば上手く学べるのではないかということを目指している。パターンをたくさん作って、言語体系を作る。読書は



個人的な体験だが、読書をしている人の個別の経験値を見てみると、共通してやっていると思われることがあるのではないかと。それらを抽象化してみると、実は同じことをやっているのではないかと。その共通パターンを言語化するのがパターン・ランゲージの方法である。「Life With Reading」でやったことは、読書行為についての言葉をたくさん集めて、読書についての言語を作ること。言葉があることによって、考えることができるし、人と話すことができる。

パターンとは、どういう「状況」の時に、どういう「問題」が生じやすく、それをどう「解決」すればよいか、その結果どうなるか、その状況問題解決が抽象的に書かれている。抽象的な言葉を使うのは、「具体性の罠」に陥らないためである。パターン・ランゲージには「コミュニケーションの語彙」「認識の眼鏡」「思考の構成要素」の3つの機能がある。どういうふうにしたら上手くできるのかということが言葉になっているので、できない人にアドバイスがしやすくなる。本について語るとき、その内容について語ることが多いが、どうやって読んでいるかについて語り合うコミュニケーションのツールとして利用できる。また、我々は言葉があることによってその世界を認識することができる。いきなり楽器を弾けと言われても弾けないように、いきなり読書しろと言われても無理だという話があったが、読書も上手くやるためにはコツとかトレーニングを積む必要があると思う。そのトレーニングのきっかけとしての「認識の眼鏡」となる

パターン・ランゲージの歴史は、1970年代建築分野で、建築設計のための方法論として作られた。1980年代後半からコンピューターの発達で、ソフトウェアの領域で広がった。その後、組織そのものや、「教え方」など人間の活動のパターン・ランゲージなどが生まれていった。井庭崇研究室では10年前から人間の行為や活動におけるパターン・ランゲージの研究を行ってきた。現

在、学校でのパターン・ランゲージの活用のサポートや、パターン・ランゲージを実践する方々のコミュニティを作ったりしている。

## ワークショップ

講師：木村紀彦氏（「Life With Reading」プロジェクトリーダー）

- ① 「Life with Reading—読書の秘訣カード」を使った対話のワークショップ  
「どうやって (how)」読書に取り組んでいるかを語り合う。カードをシャッフルし、一人あたり3枚ずつ配る。配られたカードを見て、そこに書かれている「読書の秘訣」についての自分の体験を振り返る。その中から1枚を選んで、それにまつわる自分の経験談、どうやって本を読んだか、どうやって本に向き合ったかななどをグループに語る。経験がない場合は、グループ内にこんな経験ないかと投げかける。
- ② 「Life with Reading—読書の秘訣カード」を使ったアイデア発想ワークショップ  
パターンをもとに、図書館や書店で新しいアイデアを作るというワークショップ。パターンには問題とその解決策が書かれている。そのパターンが実現されるようなアイデアを出す。図書館等で実現したい「読書の秘訣」パターンを選び、実現するためのアイデアを出す。「発想の素材」として、図書館で取り組む新しい企画のアイデアを作る。最後にファシリテーターが発表する。A～I各グループの発表内容は次のとおり。（発表順）

### Hグループ

課題：公共図書館 奥の本棚の本の利用

選んだカード：「自分なりの書き込み」

アイデア：しおりを作って本にはさみ、コメントを書き込めるようにする。

### Gグループ

課題：県立図書館 いろいろな人に来てほしい

選んだカード：「本の散策」「好きな読み方」

アイデア：検索しないで好きに見る。違う場所に配架して本を探す。配架間違い探しデーを作る。夜の図書館でキャンプをやる。

### Eグループ

課題：高校図書館 図書館に来ない生徒に来てほしい

選んだカード：「まわりを巻き込む」「感覚が近い人」

アイデア：校内放送で本を紹介してもらい、「笑っていいとも」形式で次の人が本を紹介。

### Fグループ

課題：大学図書館 本を読んでもらう

選んだカード：「まわりを巻き込む」「感覚が近い人」「自分の本棚」「今日のおとも」「追っかけ読書」

アイデア：学生に今日の1冊を1日ずつ選んで、1冊ずつ増やしていき、本棚を作る。SNSで拡散。

### Aグループ

課題：公共図書館 働いていて忙しい人に来てほしい

選んだカード：「本との先約」「自分にとっての価値」「とっておきの場所」「本のデザインから」「今日のおとも」

アイデア：来館する日を作る。子どもの利用券は親子で作る。今日のおともとして、今月の1冊をお勧めする。書架づくりや空間づくり。

### C グループ

課題：公共図書館 YA（ヤングアダルト）の利用

選んだカード：「本の散策」「本のデザイン」「本との先約」

アイデア：目を引くデザインの本で、興味を引いて、本を手にとってもらう。本との先約用にスケジュール表を作る。ワークショップを行う。

### B グループ

課題：公共図書館 多文化、外国の方

選んだカード：「感覚に近い人」「自分の本棚」

アイデア：外国人の感覚に近い人、外国の本に興味がある人が選書して本棚を作る。

### I グループ

課題：中学図書館 本を好きになってもらうには

選んだカード：「勇気の源泉」

アイデア：主人公やキャラクターに注目した本の紹介を展開。子供たちの問題に関する本を紹介。

### D グループ

課題：高校図書館 教室から遠く生徒が来ない

選んだカード：「自分の本棚」

アイデア：本棚を見てみたい先生を選び、その先生の本棚の写真を撮り、図書館に一部再現。



## 2-2 分科会報告

分科会名	第2分科会
日時	平成30年11月30日(木)13:30~16:30
会場	群馬県立図書館 研修室
テーマ	災害時及び復興における図書館の対応と役割
開催趣旨	<p>近年、熊本地震、西日本豪雨災害、北海道胆振東部地震など災害が増えている地震や水害など自然災害が比較的少なく安全と思われている群馬県でも、いつどこでどのような災害が発生するか分からない。</p> <p>災害が発生したとき、図書館職員にはどのような対応が求められるのか。災害時、図書館にはどのような役割があるのか。</p> <p>第2分科会では「災害時及び復興における図書館の対応と役割」をテーマに、日本図書館協会図書館災害対策委員会委員として多くの災害現場、被災図書館を見てきた株式会社 栗原研究室の川島宏氏に、災害による図書館の被害状況や再開への道のりについてお話を伺うとともに、東日本大震災を経験された名取市図書館の加藤孔敬氏（東日本大震災当時は東松島市図書館職員）をお招きしてご講演いただくことで、被災から復興に至るまでの図書館の対応と役割について考える。</p>
日程・内容	<p>13:30~14:30 講演 「自然災害による図書館の被害と復旧」 川島宏氏 (日本図書館協会図書館災害対策委員会委員 株式会社栗原研究室)</p> <p>14:40~15:40 講演 「災害への対応:東日本大震災の経験から」 加藤孔敬氏(名取市図書館)</p> <p>15:50~16:30 パネルディスカッション 「災害時及び復興における図書館の対応と役割」 パネリスト 川島宏氏 加藤孔敬氏 中沢孝之氏(草津町立温泉図書館) コーディネーター 井上淑人(群馬県立太田フレックス高校)</p>
参加者状況	合計 42人(一般参加者 32人、講師2人、スタッフ 8人)
係分担	<p>講師・パネリスト:川島宏氏・加藤孔敬氏 パネリスト:中沢(草津) コーディネーター:井上(太田フレックス高) 司会:由良(前橋東) 受付:斎藤(千代田)・俣田(県立) 記録:田村(高崎中央)・岡村(太田新田)・大館(太田中央) 写真:大賀(みどり笠懸) 会場:大澤(太田フレックス高)・山本(県立)・関口(県立) 接待:清水(高健大)</p>
配布資料	・レジュメ
評価 反省 その他	<p>・東日本大震災を経験された加藤氏と、地震や気象災害の被災図書館を多くご覧になってきた川島氏お二人のお話しは、被害状況や復旧作業の映像もあって、具体的でショッキングなものであった。災害時に自分の図書館には何が起こるのか、その被害を最小限に抑えるために何をしなければならないかを考えておく必要性を強く感じた。</p> <p>・アンケートでも、自館の状況に危機感を覚え、防災意識を改める機会になったという意見が多かった。</p>

## 講演「災害時及び復興における図書館の対応と役割」

日本図書館協会図書館災害対策委員会委員  
株式会社栗原研究室

川島 宏氏

私は図書館の基本計画の策定や設計を行う建築士ですので、図書館を外から見ています。被災した図書館を訪問するという意味では、建築士の中では一番見ていると思います。

「群馬県」「災害」とインターネットで引くと「群馬県はあんまり地震がない」「比較的災害がないところだ」と書いてあります。だから、私の役割は、みなさんに危機感をもってもらうことです。やるべきことは防災計画をきちんとたててトレーニングをすること、それぞれの館に合った具体的な行動をすることです。そのためには災害が発生すると施設がどのようなようになるのかを考える必要があります。過去の災害記録とか、震度予測とか、洪水ハ



ザードマップのチェックとかで館ごとのリスクを知り、それを基に事前に計画を立てる。必要であれば構造の耐震化対策を施していくことが必要になってきます。群馬県立図書館は1970年代に建てられたもので、後から書架の補強がしてあり、耐震補強の工事も施してありますが、そういった意識を持って施設の維持管理していることがわかります。

一番大切なのは人の命です。開館中の危機的状況なら利用者を守ることが最優先されるべきです。そのためには、まず自分が無事でなければなりません。津波で亡くなった図書館員がいたことを心にとどめ、命を守る行動をとるよう、正しい情報を得て慎重に判断することが必要です。資料保存の視点からは、郷土資料や特別コレクションのような貴重で代えのない資料をチェックし、水損、カビ、火災、紫外線から守るよう注意しましょう。地下より1階、1階より2階が水に対して安全です。また、手洗い、冷暖房ラジエーター、天井付けエアコンからは離れたほうが安全です。天井裏に水系の配管がないかチェックできるとさらに良いのですが、大型複合施設では確認が難しい。東日本大震災では、運悪く破損した配管からの漏水が、床に散乱した郷土資料を濡らした館があって、訪問時に乾燥させていました。また、サーバの安全性やバックアップシステムにも注意を払うことが望ましい。

平成30年7月の西日本豪雨は、6月末から降り続いた多量の雨により、7月6日から7日にかけて広範に洪水被害が発生し、土砂災害が多発しました。200人を超す人命が失われ、図書館でも浸水被害が発生しました。図書館災害対策委員会は各県立図書館から被害情報を集め、重篤な浸水被害が生じたことを知りました。被害状況の把握と支援の可能性を探るため、岡山県と愛媛県の4館を訪問しました。浸水高さが1mを超えた倉敷市真備町・大洲市肱川町・宇和島市吉田町の図書館は共通して図書損失が多い。泥・有機物が混ざる雨水に浸かり、泥汚れ・カビ・臭気が残り、加えて猛暑の中で片付け作業は難航しました。木製家具は水により劣化しやすく、水を吸った本が膨張することもあって壊れやすい。内装材は一般に耐久性はなく、特にカーペット・石膏ボード・クロス類は再使用することは無理で、内装工事を要します。電気設備は隠蔽部が多く、精密で、漏電リスクが高いため、早期再開の障害となります。床配線対応の2重床の内部に泥水が入り込むとダメージは大きいです。

熊本地震は平成28年5月と11月に訪問しています。直下型の地震で、被害を受けたエリアは狭い。東日本大震災と違って、開館している時間ではなかったので、利用者避難の問題はありませんでした。熊本県は保険リスクのランキングは安全の4ランクに入っていて、群馬県も同じランクに入っています。しかしながら、熊本県で地震は起きました。群馬県では地震は起きないと思っていると危ないと思います。地震の頻度は少ないですが、活断層もありますし、火山があ

るということは、何があるか分からないので、タイムスパンとすれば災害の起こっている回数は少ないかもしれませんが、危険があると認識していた方がよいと思います。

## 講演「災害への対応：東日本大震災の経験から」

加藤孔敬氏(名取市図書館)

災害の対応についてはマニュアルや世の中の前例に縛られがちです。東日本大震災の後に防災時の研修を受けた際、まずは災害の認識をする、想定に縛られないことが必要と学びました。気象予報士や地理系の話を見ると、日本は世界で4番目に雨の量が多い国で、非常に火山が多く、プレートに乗っているので地震が多いと言われています。世界でも屈指の災害大国です。

西日本豪雨の中でも土砂災害が起きましたが、全国に55万カ所の土砂災害の危険地区指定地域があります。災害が多い国ですが、その反面、自然豊かな国ですので、日本人として災害とうまく付き合う、災害に対する備えを念頭に置く必要があります。例えば資料が水につかった場合、郷土資料など大切な資料をどうやって救うのか、トリアージとってどの資料から優先的に救うのかということ。私たちは頭の中でイメージできていないといけません。災害が発生した場合、図書館職員であると同時に、自治体の職員として何をしなければならないのか、自立するために支援を受ける受援についても、どう対応するのか考えておくことが必要です。

東日本大震災時、東松島市は住宅地の65%が冠水しました。図書館は冠水を免れましたが、余震で天井が抜ける被害がありました。その他の地区では人の高さまで冠水し、資料が泥にまみれたところもありました。発災後は24時間態勢で、避難所対応などに臨まなければなりません。復興業務でも被災者を仮設住宅に入れただけでは終わりません。その後、地域の図書館として何ができるのか、考える必要があります。また震災資料を集め、後世の人に伝えることも重要です。各自治体で図書館再開の時期は様々で、災害が大きかった自治体ほど再開は遅くなりました。移動図書館車で部分的再開やできる範囲での再開など、人間の知恵でどう災害を乗り切るか、どうやり過ごすかということが大切です。

再開後の図書館での市民ニーズは、写真集、辞書、電話帳、住宅地図、生活情報のパンフレットなどでした。役所側からのニーズは、市長から災害に役立つ本を持ってくるようにとの指示があったり、復興のヒント探しの資料を求められたりしました。県庁に震災関係の資料を提供する、沿岸部の医師への情報支援を求められるなど様々なことがありました。

被災後の東松島市では避難が長期化するなかで、避難所に本を置いて歩きました。支援で寄せられた本を整理し、被災者のために必要な本を置くようにしました。避難所では、絵本や漫画本、軽めの小説などが人気でした。また、他県からのボランティアに避難所で紙芝居をよんでもらうなど、支援者との繋がりを持つような努力もしました。

被災後の支援はとても大切ですが、希望しないものが支援物資として大量に送られてくるのが問題でした。本もそうですが、支援された本をすべて図書館資料として受け入れるのではなく、避難所の被災者へ持って帰ってもらい、自分の本にしてもらいました。施設における本や図書館における本は、ボランティアを受け入れ、整備、整理をしてもらいました。支援者の満足度を上げ、私たちも満足するようにしました。

また、ボランティアだけではなく、緊急雇用として被災者の雇用についても考え、資料のブッカーかけや資料を整理するなどの雇用を生み出しました。被災した学校図書室の復興をめざし、



ボランティアを頼み、再建を図りました。ただ、ボランティアをしてもらうだけでなく、できるだけ被災者との交流、被災した場所の見学をしてもらい、災害を認識してもらいました。市の復興事業の一つとして、市民の体験記や震災関連資料や写真を集め、行政から発行されたものや新聞の原紙などとともに残すためのアーカイブ化事業を図書館が請け負い、集めたものを随時公開していきました。ただ資料をアーカイブするだけではなく、支援者にも興味をもってもらうため、世界の人へ知ってもらうため、体験談の英訳のボランティアも頼みました。新聞のスクラップ方法は新聞の記事にバーコードを貼って、見出し記事の書誌を作成しました。それを作成する作業も緊急雇用の方の仕事にしました。写真のキャプションもいれて検索もできるようにしました。その後、防災関係のワークショップを行い、来館者に自分が被災した場所の津波の高さマップを作成してもらいました。他県の修学旅行生に震災記録の話伝える防災教育もしました。成果物として、町じゅうを電子図書館「まちなか震災アーカイブ」として、看板や施設などにQRコードを貼りました。QRコードをあてるとその地域の被災状況が分かり、津波の到達点なども知らせることができるようになっていきます。震災記録を残し、後世に伝える役割を担っています。

## パネルディスカッション

太田フレックス高校の井上氏をコーディネーターとして、講師の川島氏、加藤氏及び中沢孝之氏（草津町立温泉図書館）より下記のお話がありました。

井上：お三方からテーマに沿って、それぞれお話をいただきたいと思います。

川島：私は図書館の災害時になすべき役割について、答えを持ちあわせていません。別の大会で東北のほうで集まりがあった際に、陸前高田、気仙沼、大崎等の色々な人が災害時の図書館の役割について話してくれましたが、その中で気仙沼の方が（被災した時から、ずっと図書館を守ってきた方）の言葉が心に残っています。「図書館はただそこにあるだけでいい」すごく重たい言葉。私にとってその言葉が救いでした。



加藤：西日本豪雨の動画を上映（6分）

真備町の図書館も話していましたが、水を吸った本は膨張して書架から取り出せません。書架をチェーンソーで壊して取り出し、とても苦労したと言っていました。

帰り道に川島氏も「日本どこでも安全なところはないな」と言っていました。ハザードマップはあたるということ。悔ってはいけません。

川島：応急危険判定ということですが、判定はすぐに来るわけではありません。市民・住宅が優先。建築士が図書館に来てくれることはほとんどありません。災害直後に館長さん方は、そこに職員を入れていいのか判断に迫られます。それはとても重たいことだと思います。

中沢：たぶん皆さん、今日の話聞いて「ああ、すごいな」「大変だな」と思われたと思います。でも、「群馬って台風来ないよね」「浅間山が噴火しても遠いよね」と思っている方もいると思います。考えなきゃいけない。そこで群馬は油断があると思います。

まず災害がおきたときに何を守るのか。学校図書館なら？公共図書館だったら？それともう一つ停電になったら皆さんの図書館はどうなるのか。停電は今起こるかもしれません。ここで起きていなくても、新潟や群馬の山奥で地震や火事が起きているかも、大雪が降っ

て送電線が切れるかも知れません。その時、皆さんの図書館はどうなるのか？そんな時、どうすればいいのか考える。ハザードマップ、地域資料の活用。図書館で一番大切な資料は何か考えておかないといけません。だが、一番大切なことは人の命を守ることです。

加藤：JRの計画運休があった際に、図書館でもツイッターで閉館を知らせていました。

図書館でも人は亡くなることもありえます。危機管理は日頃から想定をしておくべきです。

中沢：東日本のとき、計画停電がありました。図書館を開けるのか開けないのか、また情報提供の部分で、どのように判断するのか考える必要があります。

加藤：対岸の火事ではありませんが、北海道胆振地震の時北海道がブラックアウトになりましたが、クラウドサーバーが落ちて他地域の図書館がホームページを閉鎖しなければいけないということもありました。

井上：まずは人命というのが3人の共通の提議でした。一人職場で災害が起こった時にどう対応するかも大きな問題です。まずは命を大事にして、次に貴重な資料を大事にするということをもう一度考えていきたと思います。



## 参加者の声（アンケート結果）

図書館大会に参加した方々から、御意見をいただきました。なお、ご意見は紙面の都合で編集してあります。

### （１）記念講演について

- ビブリオバトルの真髄に触れられたかなと思いました。楽しむことが大切ですが、どうしたら楽しませられるかをもっと考えてみたいと思います。
- 今回の講演会に参加させていただき、ビブリオバトルをスタートするハードルが下がりました。気軽に図書室ではじめ、ゲームとして楽しみ、本に出会う場所にすることができると気付きました。ビブリオバトルにチャレンジしたいという生徒がいる中で、私がどんなお膳立てをすればよいのか思い悩んでいましたが、もっと気軽に楽しむことが大切なのだとなり、本当に良かったです。関西の方はおもしろい。楽しい講演で本当に良かったです。ありがとうございました。
- 考案者の谷口先生から、ビブリオバトルのスタートから理論、そして実際のやり方まで具体的なお話が聞けてとても楽しかった。（ビブリオバトルという言葉しか知らなかったので）参加できてよかった。
- ルールの説明、小学生のお子様にもわかりやすく、なじみのあるよう、工夫がされていると感じました。表現力をつける場になることも魅力だと思いました。
- 小さい頃から本に親しんでいる人はたくさんいると思いますが、大人になってから本を好きになる人もいます。私もその一人です。きっかけは、本好きの人からの影響が大きかったです。これがビブリオバトルなんだろうなと思いました。
- ビブリオバトルについて、コミュニケーションにつながるということが良いところだということが勉強になった。
- ビブリオバトル考案者の方のお話が聞けたので参考になりました。ビブリオバトルの資料や本からは見えない部分が理解できたことは、ありがたかった。
- 実際にビブリオバトルを見たこともやったこともなかったので、とても勉強になりました。きちんとしたルールや強制ではなく、「やりたい人がやる！」「ゲームである」など理解しているからこそ楽しめるのだと思いました。
- 自校の委員会でも何度か開催していましたが、イベント型として行うことにこだわっていました。今日のお話を聞いて、日常的に行うことが大切だということがよくわかり、もっと気軽に回数を重ねていこうと思いました。また、谷口先生自身が、魅力的でお話も分かりやすく、先生だからこそビブリオバトルが今のようになっただと感じました。
- 直接谷口先生のお話を聞くことができ参考になりました。学校現場で取り組む際に実践したいです。とても勉強になりました。
- ビブリオバトルという言葉は初めて聞き、まずはその会に参加してみたいなりました。私は自分からというのが難しいので、おススメいただいたものから読んでみたいです。ゲーム感という大事さ、すごくよくわかりました。
- 高崎市の友人が何回かビブリオバトルに参加し、「楽しかった」と言っていました。今回、谷口先生から詳しく伺うことができ、様々なシーンでの可能性を感じました。大切にしなければならない基本を忘れず、より本を知り、人を知れるようになりたいと思いました。「楽しいは正義」、多様性、他人の”ふつう”と自分の”ふつう”の考え方の違いを感じることもとても大切なことで、思いやりを育てることにもなると思いました。
- ビブリオバトルが日常化するように私自身も楽しんでやっていきたいと思いました。

- 2時間、長いどころかあっというまででした。頭の整理をしながら生徒のための図書館運営に携わっていかうと思いました。
- ビブリオバトルは小規模で日常的に気軽にやっていかうと思います。イベント型でやってきましたが、生徒（高校生）からの反応も好評です。考案者の方の話は、やはりとても実感がこもり、良かったです。ラノベから世界を広げて本を読むよう伝えたいです。
- ビブリオバトルの本質がわかり、有意義な講義でした。
- ビブリオバトルを考案された方からの話が聞けて大変参考になりました。学校で行う際の注意点なども聞けたのでこれから参考にして開催していきたいです。
- 普段から気になっていたことについて谷口先生からお話を聞くことができ、原点に戻って見直すことができてよかったです。生徒が自発的に行ってくれるのが良いのだということ再認識しました。
- とても勉強になりました。開催する時は、目的・行うことで得られるものなどについての説明を求められることがありました。今回の話を聞いて、しっかりと説明ができるようになったと思います。
- ビブリオバトルをつくった方のお話を直接聞くことができ面白かったです。子どものとき読書感想文が苦手、今でも課題図書は苦手です。やり方を間違えると本嫌いになるという話は本当にそうだった。北風でなく太陽で！
- ビブリオバトルがつくられた背景ややり方などとても参考になる講演でした。”大人が楽しめるからこそ生徒（子ども）たちが楽しめる”とは知らなかったのも、とても参考になりました。ビブリオバトルを今後学校図書館にも取り入れて少しでも多くの本好きを増やしていきたいです。ありがとうございました。

## (2) 第1分科会について

- ・有隣堂さんの書店としての読書に対する思いに驚きました。図書館としてももっと真剣に取り組んでいかなくてはならないと思いました。木村さんのお話はとても分かりやすく、パターンランゲージ、ラーニング・パターンについて理解が深まりました。
- ・ワークショップで体験することで、良さがわかりました。
- ・書店さんの思いや様々な例を知ることができました。
- ・ワークショップで、様々な意見や考えを伺うことができ、よかったです。読書について考える機会になりました。
- ・ワークショップが楽しかったです。自分の学校でも実施します。
- ・ワークショップは、分野、働いている場所の違う方との話、グループだったのでよかったです。パターン・ランゲージ、少しわかった気になりました。
- ・新たな発想が生まれるきっかけをいただきました。とても楽しく学ばせていただきました。
- ・ブレンストーミングにより、図書館の課題解決案の発掘ができた。すぐ実践できそうな案を実施してみたい。
- ・パターンカードを使って、図書委員でワークショップしてみたいです。とても楽しい研修内容でした。
- ・楽しいワークショップで、今後生かせそうなアイデアやヒントが得られました。
- ・頭をフル回転させて臨みました。新しいことを学べて楽しかったです。そして刺激を受けました。ぜひ実践してみたいです。
- ・パターン・ランゲージの活用は聞いたことがなく、とても興味深かったです。ワークショップでも、公共図書館、学校図書館司書が集まっていたので、双方の話を踏まえてお互いの課題解決ができたように思います。他のグループの発表も大変参考になりました。
- ・読書支援ツールについての理念、実践方法について説明があり、新しい知識を得ることができた。

### (3) 第2分科会について

- ・災害に対する考え方を改めて考え直さなければと思いました。
- ・日頃より、意識しておくことが大切だと改めて感じました。経験したからこそ分かる情報などが知れて勉強になりました。自分に置きかえた時、何ができるかと考えさせられる。
- ・具体的な話で勉強になりました。日頃からシミュレーション等をして考えていきたいと思います。
- ・「自分のところは災害が少ない」という考えはなくさなければいけないと思いました。図書館職員としてだけでなく、自治体職員にとって、とても貴重な内容でした。
- ・災害は忘れたころにやってくる。いまだに復旧工事中の図書館があるとのこと。うちの図書館は天窗やおしゃれな電球がいくつもぶら下がっているのが怖い。一時緊急避難所にもなっているが正直心配です。デザインだけでなく、これからは安全に配慮した設計が重要だと感じた。
- ・実際に体験した人の話や映像も見ることができた。川島さんの話を聞いて、時間があるときは建築当時の設計図を見て、どこに柱があって…とか確認しておくことも大事だと思った。図書館は何かあった時に忘れられがちという言葉は本当に実感している。
- ・災害で浸水し、たくさんの本がダメになり、衝撃的でした。何が一番大事か。人命と資料。危機管理の大切さを感じました。ちなみに本図書館は何も対策がないです。
- ・今日は貴重なお話をありがとうございました。水害の被害状況の写真や被災状況の生の声が聞けたことはとても勉強になりました。
- ・図書館関係の大会では、災害について講演を聞く機会がないので、大変貴重なお話が聞けました。来年もまたお願いします。
- ・地震によって、図書館内がどうなったのかを知れてとても勉強になりました。自館の図書館は、本が高い位置にまで入っているので、今後対策をとっていききたいと思いました。災害を知って、災害を乗り越えていきたいと思います。災害はいつ起こるかわからないので常日頃から対策等を考えていきたいと思います。
- ・わたしも一人職場の学校図書館にいます。学校は築37年の古い校舎です。生徒が危険な目に合わないよう、事前の対策をしたいと思います。見逃し三振しないようにします。

### (4) 全般（大会全体、記念講演や分科会）について

- ・これからも大会関係者だけでなく、一般の人にも記念講演を公開していただきます。
- ・乗附小のディスプレイを実際に見られてよかった。
- ・いつも図書館大会を楽しみにしているのですが、ホームページを見てもなかなか見つけにくいです。もっと早く予定がわかればと思います。
- ・図書館関係の講師とはまた違い、読書に関する様々なアプローチがあることがわかり、大変勉強になりました。
- ・当日申込みで参加できてありがたいです。年をとると学べなくなるので、参加できてありがたいです。
- ・講演の内容を深く知らずに参加しましたが、私自身の勉強になった一日でした。子どもに目をかけ気味ですが、自分自身の糧に本にたくさん出会いたいと思いました。
- ・記念講演も分科会も大変興味深く聞くことができました。
- ・一日でボリュームがありましたが、中身が充実していてよかったです。
- ・新しい発想を得ることができました。ありがとうございました。

### (5) 今後取り上げてもらいたい企画（記念講演講師、分科会の講師・テーマなど）

- ・語彙力について・絵本や読み聞かせについて・学校図書館に特化した著作権の話・書店員の話・選書
- ・POP、しおり作成など

# **第16回 群馬県図書館大会 報告書**

発行日：平成31年2月

編集・発行：群馬県図書館協会©